

論 文

# 学齡超過者の訪問教育授業における回想法の試み

後藤 宏<sup>1</sup>・長野恵子<sup>2</sup>

(福岡県立柳河特別支援学校<sup>1</sup>, 西九州大学子ども学部心理カウンセリング学科<sup>2</sup>)

(平成27年1月13日受理)

## **Trial of reminiscence therapy in visiting education classes for a student with delayed education**

Hiroshi GOTO<sup>1</sup> and Keiko NAGANO<sup>2</sup>

(*Fukuoka Prefectural Yanagawa Special Needs School<sup>1</sup>,  
Department of Psychological Counseling, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University<sup>2</sup>*)

(Accepted January 13, 2015)

### **Abstract**

The term 'students with delayed education' refers to adults with disabilities who were late in commencing their schooling or were exempted from schooling during their school-age years and who did not attend school under the compulsory special education system in place as of 1979, because they were already older than school age by that time. The purpose of this study was to investigate the process of reminiscence therapy which was implemented with a student with delayed education. During Independence Activities in visiting education classes, eleven sessions of the individual reminiscence therapy were employed with a male student with cerebral palsy who entered the middle school division of a special needs school after reaching age 60. As a result, it has been revealed that reminiscences can be categorised into introductory, developmental and advanced phases and topics and content of conversations change in the course of repeated reminiscences. Based on these results, the significance of the reminiscence therapy in visiting education for a student with delayed education over age 60 was discussed from educational, psychological and social work perspectives.

Key words : Special needs education 特別支援教育  
Student with delayed education 学齡超過者  
Visiting education class 訪問教育授業  
Reminiscence therapy 回想法

## 1. 問題と目的

1979年の養護学校義務制実施から35年、「特別支援教育の推進について（通知）」（文部科学省，2007）により特別支援教育が開始されてから7年が経過し，我が国における障害のある幼児児童生徒を取り巻く状況は大きく変化しつつある。各学校において子ども一人一人の教育的ニーズを把握し，医療，保健，福祉等との連携を図り，適切な指導及び必要な支援を行うことが求められている。特別支援教育を充実させることは，共生社会の形成に向けて，「インクルーシブ教育システム」構築のために必要不可欠なことであり，これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が，積極的に参加・貢献していくことができる共生社会を目指すことは，我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である（文部科学省，2012）としている。

2009年3月には，特別支援学校幼稚部教育要領，特別支援学校小学部・中学部学習指導要領，特別支援学校高等部学習指導要領が告示された。改定による主な改善事項の一つに，障害の重度・重複化，多様化への対応が挙げられており，特別支援学校学習指導要領解説総則等編（文部科学省，2009）には，教員を派遣して教育を行う場合（訪問教育）には，個々の実態に応じた指導を行うため，弾力的な教育課程を編成することが必要となることも示されている。

訪問教育とは，「障害が重度・重複していて養護学校等に通学困難な児童生徒に対し，教員が家庭，児童福祉施設，医療機関等を訪問して行う教育である」（文部省，1978）と規定され，1979年の養護学校義務制実施以降，小学部と中学部において全国で実施されるようになった。1997年には特殊教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議の「特殊教育の改善・充実について」（第1次報告）において，「小・中学部と同様，高等部における訪問教育を実施していく必要があると考える。」と報告されたことで，1997年度からの試行的実施後，1999年の学習指導要領改訂では，盲学校，聾学校及び養護学校高等部学習指導要領にも訪問教育について明記され，高等部においても，2000年度より全国で本格的に実施されている。

猪狩（2014）は，訪問教育のあゆみについて振り返り，高等部訪問教育の実現は，中学卒業後も「もっ

ともっと勉強したい」と思っていた障害児の教育権保障の大きな一歩となり，高等部訪問教育の実現により再び生まれた願いとして，就学猶予・免除の成人障害者と関係者の「学校で学びたい」，「学校に行かせたい」という教育保障と教育年限延長に対するニーズにもつながったことを指摘している。このことは，同じ40歳代・50歳代でも，中学を卒業していれば高等部進学の対象となる一方で，養護学校義務化以前に就学猶予・免除により義務教育を終了していない場合は高等部進学の対象にならないという課題が残されていることを示唆している。

我が国では，全ての国民は日本国憲法第26条，教育基本法第5条により，その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負っており，学校教育法第16条において9年の普通教育を受けさせる義務について，学校教育法第17条において就学義務について規定されている。しかし，学校教育法第18条では，病弱，発育不完全その他やむを得ない事由のため就学困難と認められる場合，就学義務が猶予又は免除される場合があるとされている。そのため，養護学校が未整備で訪問教育も充実していなかった1979年以前は就学猶予・免除となる多くの重度障害者が存在した。1979年に養護学校が義務化されたものの，その時点で学齢（6歳－15歳）を超えていた人たちは義務教育を受ける対象とならず，学齢超過者として義務教育から取り残されたままとなり，その数は全国で25万人を超える（西日本新聞，2007）とも言われている。

就学猶予・免除の成人障害者への教育保障に関しては，全国障害者問題研究会2006・2007年度研究プロジェクト「就学猶予・免除の成人障害者の教育権保障に関する調査研究」（代表：猪狩恵美子）の全国調査により，当時の各自治体による学齢超過者の受け入れ状況が明らかにされた。その後，学齢超過者を受け入れる自治体は増えてきたものの，そのための条件や内容等は各自治体の考え方により異なっている。

福岡県では2009年1月，県教育委員会より「学齢超過者に対する訪問教育実施要領」が示され，就学猶予・免除となっていた成人障害者にも学校教育を受ける機会が一部認められた。同県では，3月1日付けで一旦小学部第6学年に編入学し，卒業後の4月から中学部で週3回（1回2単位時間）の訪問教育授業が受けられる。県内の障害児者施設入所者に限定され，受け入れ人数にも制約があるが，中学部

卒業後は高等部受検による進学にも道が開かれ、実質6年間の学習機会を得ることも可能となった。

このように、各自治体の教育委員会を中心に学齢超過者の状況把握と就学のための条件整備等が行われる一方で、宮城県では、学齢超過者の義務教育就学が開始されて2年目の2012年より、宮城県重症心身障害児(者)を守る会主催による「宮城県学齢超過就学者の教育を語る会」が継続して開催され、毎年、対象者のいる特別支援学校からの事例発表や教諭・家族・フロアを交えての意見交換等が行われている。しかし、同会でコーディネーターを務めた阿部(2012)は、教師が取り組んだ内容や生徒の様子は報告されるものの、教育者としての思いや願い、かかわり方に対する説明がなく、実施してみたの問題点や今後の提言等もほとんどなかったことへの物足りなさを指摘している。

渡部(2009)は、鳥取大学附属養護学校・附属特別支援学校専攻科における授業実践を「青年期らしい授業のあり方」として整理し、青年期らしい教育内容、題材、タイトル、授業の構成と展開、評価活動として紹介している。特に青年期の「自分づくり」を支援する授業を創造することや「自分づくり」を促す評価活動を心がけることの重要性を指摘している。このことは、単に青年期の問題として捉えるのではなく、既に高年齢となっている学齢超過者に対しては、「高年齢期らしい授業のあり方」があるのではないだろうか。

黒川(2005)は、国内外で高齢者に特に有効といわれ、実践されている心理療法の一つとして回想法(reminiscence, life review)を挙げている。回想法は、アメリカの精神科医バトラー(Butler, R.N.)によって1963年に提唱された高齢者を対象とする心理療法で、「クライアントが、受容的、共感的、支持的な良き聞き手とともに心を響かせあいながら過去の来し方を自由に振り返ることで、過去の未解決の葛藤に折り合いをつけ、そのクライアントなりに人格の統合をはかる技法」である。日本においては、1990年代より黒川(1994)、野村(1998)らの草分けの研究と実践に端を発し、現在では病院、施設、地域等で広く適用されている。回想法の形式には、一対一で行う個人回想法と、集団心理療法としての回想法、夫婦回想法、家族回想法等の方法がある。また、回想法は、治療、セラピーとして行われるだけでなく、アクティビティーとして施行される場合もあり、福祉施設等で入居者が楽しい時間を

もつことや少しでも交流を図ることを主目的とした「昔話の会」のようにさまざまなバリエーションがある。さらに、回想法により高齢者一人一人の人生を振り返り、ライフレビューブックとして1冊の本にまとめることもできる。志村(2005)は、ライフレビューブックを手掛かりにしてさらに懐かしい思い出を深め、懐かしい資料を繰り返し眺めることにより、高齢者の心の中が整理できるとし、回想法における高齢者と援助者との語りによる交流には相互作用的な側面があり、いい聞き手によって、高齢者の語りがいい形で展開し、高齢者の教育的な内容を含んだ語りは、聞き手の学習効果をもたらすことを指摘している。

筆者は、前任校のD特別支援学校で訪問教育担当として3名の学齢超過者とかわった。対象者全員が筆者より年上(当時40歳代後半～60歳代前半)であり、生活年齢を考慮しながら、担任としてどう向き合うか、どういう教育内容を取り入れて、どのような授業を展開すべきか、常に悩み、試行錯誤を繰り返してきた。特に、60歳を超えるAに対しては、すべての授業時間を担当することになり、二人で多くの時間を共有する中で1対1の個別の関係におけるコミュニケーションを大事にしながら、高年齢期に効果的な授業のあり方を検討し、実践していく必要性を感じていた。

しかし、これまで学齢超過者の訪問教育に関する教育内容・方法等の研究は極めて少ない。施設での訪問教育や学齢超過者のことはまだまだ知られておらず、より多くの人に正しく認識してもらうためには、実践に基づく事例報告や現状と課題等について話題提供を行う必要がある。

そこで、本研究では、60歳を超える学齢超過者Aに対して、訪問教育授業で回想法を実施し、回想の内容や様子等の記録を基に評価・分析を行い、取組の経過に伴う変容等を整理する。さらに、分析結果から高年齢の学齢超過者の訪問教育で回想法を活用した授業に取り組む意義について明らかにすることを目的とする。

## 2. 実践経過

### 1) 対象者の概要

対象者Aは、障害者支援施設に入所する60歳代前半の成人障害者である。3人きょうだいの第3子としてB市に生まれた。5人家族であったが、父母と



実兄は既に他界し、生存する身内は実姉一人である。少年期に父親の仕事の関係で他市に引っ越した時期もあったが、その他の期間はB市内の自宅で家族と同居していた。きょうだいも独立し、父親が他界した後も、しばらくは母親と一緒に自宅で過ごしていたが、2000年代初頭に施設が新規開設されたことに伴い、50歳代前半になって入所した。脳性麻痺のため、ADLは全面介助であり、常時車椅子での移動や日常生活の介護を必要とする。言語面での表出機能等に課題はあるが、双方向のコミュニケーションが成立し、思いや考えを自分の言葉で意思表示することができる。

Aは学齢期に就学を猶予され、1979年の養護学校義務制実施当時は20歳代後半になっていたため、これまで学校教育を受ける機会はなかった。しかし、20XX年4月、同じ施設の入所者CがAよりも一足早く学齢超過者としてD特別支援学校の訪問教育授業を受けることになり、「自分も学校に行きたい」というAの思いは益々強くなっていった。施設の担当職員に自分の思いを伝え続けた結果、Cの受け入れから3年後、新たに学齢超過者として受け入れる上で必要な手続きが完了し、20XX+3年4月、60歳代前半になって、ようやくAはD特別支援学校中学部への入学が認められた。

表1 対象者Aの教育的ニーズ（学習への期待）

自分の将来像（5年後・10年後の姿）のイメージ
○日本語をより正確に理解し、はっきり使えるようになっていたい。
○学校に行ったことで、友だちや知り合いが増えている。
○5年後、10年後も、おそらく現在入所している施設で生活している。
○囲碁、将棋、音楽（演歌）、テレビ視聴を楽しむとともに、毎月数回の外出も続けることができ、外出先も広がっている。
○生活の中で、学校の勉強が役立っている。
○5年後、10年後も健康でいたい。

### (3) 支援目標・支援計画の策定

アセスメントの結果をもとに、個別の教育支援計画を策定した（図1）。「より良いコミュニケーションの図り方、言葉や思い・気持ちの伝え方を学ぶ」ということをAの年間目標の一つとして位置づけ、様々な学習機会を捉えてAとの言葉によるやり取りを丁寧に行うことを心掛けた。

(4) 学期ごとのモニタリングによる計画の見直し  
毎学期の始業式と終業式には、本人からの挨拶を取り入れた。話している内容が当日の出席者にもで

## 2) 回想法実施前の経過

### (1) 訪問教育授業の概要

訪問教育は、通学が難しい児童生徒のために、教師が家庭または施設まで出向いて教育を行う制度である。筆者は、前任校（D特別支援学校）で、Aが中学部に入学した20XX+3年度の担任として、毎週3回（原則月・火・木曜日）、午後からの2単位時間（90分間）を、Aの入所先の施設に出向いて授業を行った。実施する授業は、自立活動、日常生活の指導、生活単元学習であるが、内容面ではAのニーズが十分反映されるよう心掛けた。

### (2) インテーク～アセスメント

Aが中学部に入学してからの約1ヶ月間は、①A自身が学校生活に慣れること、②Aと筆者がお互いのことを知り、信頼関係を作ること、③A自身の教育的ニーズを把握すること等を目指した。また、生活地図や日課の確認、5年後・10年後の姿をイメージすることに取り組む中で、Aには幼少期から現在に至るまでの体験を通して、「自分の言葉が、もっと人にわかるようにしたい」という思いがあり、「日本語をより正確に理解し、はっきり使えるようになっていたい」という学習への期待があることも明らかになった（表1）。

きるだけ伝わるよう、挨拶は事前に授業の中で考え、Aが言いやすい言葉を選び、何回か練習を重ねた。また、より伝わりやすくするための工夫をAと話し合い、挨拶文も出席者に配布して、各自がAの挨拶を聴きながら内容の確認ができるようにした。

2学期は、「自作の新聞（以下、『新聞』）をつくりたい」「多くの人に自分のことを知ってほしい」というAの希望を取り入れた。「新聞」は時間や場所を選ばずに、より多くの人に発信できるコミュニケーション手段であるため、Aに関するクイズ掲載と回答募集等を行うことにより、他の生徒や教師が

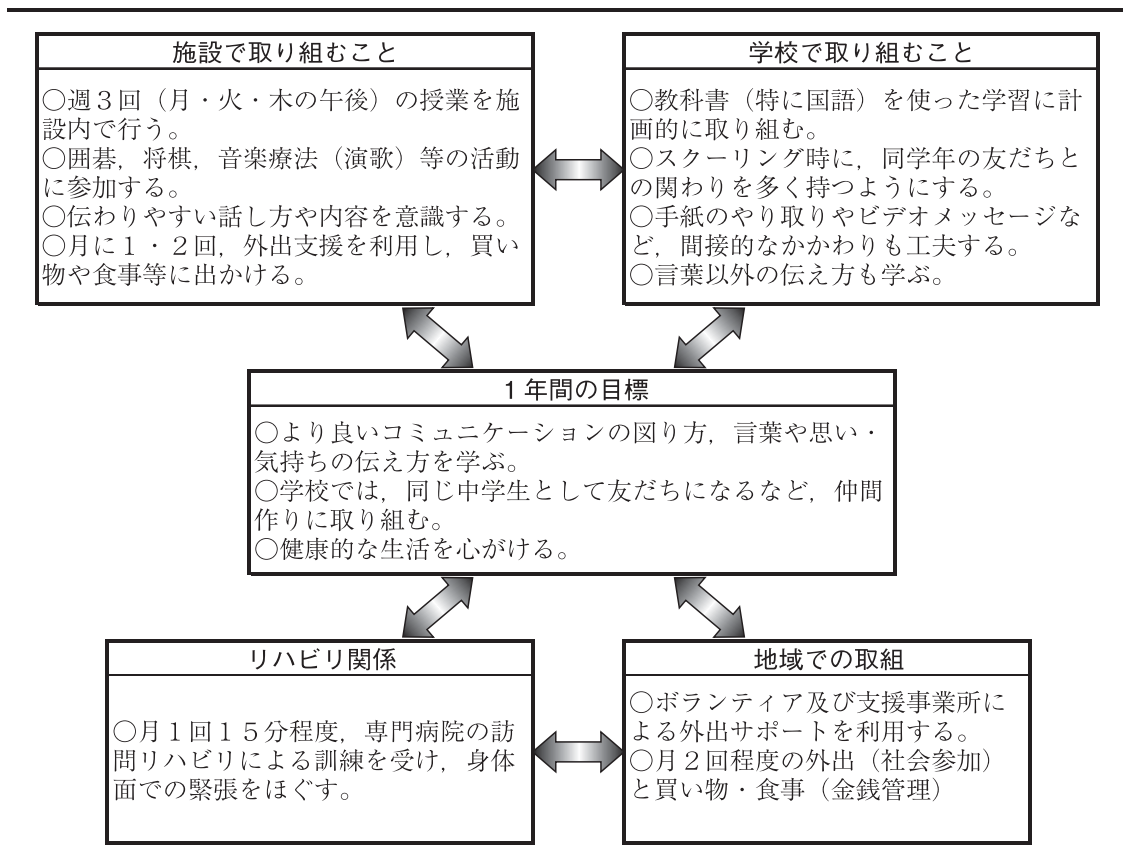


図1 対象者Aに対する支援目標

次号の「新聞」発行時の解答を期待して待つようになるなど，お互いがつながり合い，理解し合うきっかけにもなった。

また，Aは，伝えたい話題の時は，話が途切れずに続いたり，気に入った昔の歌を歌う時は，リラックスしてよく聞き取れるようになったりする特徴があった。特に，子どもの頃の家の中や周囲のことを尋ねると，まるで映像化されたような鮮明な情景やその時の様子を表情豊かに語る事ができた。そこで，3学期の授業では，高齢者の心理療法のひとつと

して取り組まれている回想法の手法を取り入れて，昔を振り返りながらコミュニケーションを図り，最終的には振り返った内容を自分だけの1冊の本にすることをAに提案した。イメージが広がるように，「ライフレビューブック - 高齢者の語りの本作り -」（志村，2005）に掲載されている1950～60年代前後の写真やライフレビューブックの内容等を紹介しながら説明したところ，Aも回想法を取り入れた授業に興味を示し，具体的に取り組むことが決定した（表2）。

表2 対象者Aの第3学期始業式挨拶文

今年，いろいろと挑戦したいと思っています。  
 3学期は，昔のことを思い出しながら，自分の本を作ろうと思っています。  
 家族のことや好きなテレビ番組も振り返りながら作ろうと思っています。  
 よろしくお祈りします。  
 ※ 20XX+4. 1. 7. 訪問教育第3学期始業式にて

### 3) 回想法の取組

#### (1) 回想法の実施に当たって

Aに対する回想法の実施に当たっては，1対1のコミュニケーションを大事にするために個人回想法

を取り入れ，20XX+4年1月20日より2月21日までの期間中，当該施設内の多目的ルームにて，訪問教育授業の中で計11回（短い時は10分，長い時は90分），実施した。主に自立活動の時間を活用して，

回想の内容や様子等を授業者である筆者が毎回文章化して記録し、授業の経過に伴う変容やかかわりの中での気づきをもとに評価・分析を行った。

回想の主なテーマは、子ども時代の楽しみや生活の様子、住んでいた場所、家族やかかわりのあった人との思い出、学校や友だちに対する思い、これからの思いや伝えたいこと等であった。特に回想を開始した初期の段階では、対象者自身が振り返りたい時期や内容を大事にし、当時の写真やテレビ番組表等も用意して、回想の手掛かりとした。また、毎回回想のはじめには、前回は振り返り、その日のテーマを確認して見通しのもてる回想につながるようサ

ポートしたが、回想中テーマから外れた話題が続いても、無理に話題を変えたりせずに、その時対象者が回想する内容等を尊重するよう心掛けた。さらに、毎回回想のおわりを明確に伝えるとともに、次回回想を行う日時を知らせることにより、その日の回想が終わっても次回への期待感につながるよう配慮した。

## (2) 回想法の実際

各回（第1回～第11回）の回想法の日時及び主な話題を表3に示す。

表3 各回の回想法の概要

回数	日時	主な話題
○第1回	20XX+4年1月20日 13:20～14:55	「特に振り返りたいと思っている時期について」
○第2回	20XX+4年1月21日 13:25～15:00	「テレビの思い出」
○第3回	20XX+4年1月23日 13:30～15:00	「テレビが家に入った頃」
○第4回	20XX+4年1月27日 13:30～14:15	「家族と一緒に写った写真を見ながらの思い出①」
○第5回	20XX+4年1月30日 15:00～15:10	「家族と一緒に写った写真を見ながらの思い出②」
○第6回	20XX+4年2月6日 14:10～15:10	「自宅周辺の思い出、父母との思い出①」
○第7回	20XX+4年2月10日 13:55～15:00	「父母との思い出②」
○第8回	20XX+4年2月12日 14:40～15:00	「兄との思い出」
○第9回	20XX+4年2月13日 14:00～15:05	「姉との思い出、家族について」
○第10回	20XX+4年2月17日 14:00～15:00	「1日のくらしの様子、正月の思い出」
○第11回	20XX+4年2月21日 14:15～15:00	「小さい頃の友だちの思い出、学校に対する思い、これからの思い」

全11回実施した回想の経過について、導入期（第1回～第3回）、展開期（第4回～第9回）、発展期（第10回～第11回）に分けて以下に述べる。

### ① 導入期（第1回：20XX+4年1月20日～第3回：20XX+4年1月23日）

第1回から第3回までの回想は、導入期として、対象者自身が主体的、意欲的に取り組めるように、A自身が最も振り返りたいと思っていた時期、内容等を回想のテーマとした。Aからは、父親の転勤に伴い、家族5人でE市に引っ越した1950年代後半（昭和32年～35年頃）の3年間のことが挙げられ、主に

テレビに伴う話題と家の中での生活の様子等について、積極的に語られた。

#### a. 第1回回想

20XX+4年1月20日に途中休憩をはさんで90分間行った。最初に、1950年代後半（昭和32年～35年頃）のことを振り返りたい理由を尋ねてみた。「親父が転勤して一家全員でE市に引っ越したから」、「（その時期に）家にテレビを買ったから」、「（テレビが入ったのは）昭和32年の5月か6月頃かな…」という回答があり、Aが昔のことで最も振り返りたい、話したいと思っているテレビに関する話題を中

心に回想法を実施した。少しでも当時のことが思い出されるように、昔の風景や道具類を写した写真集の中から白黒テレビの写真を準備（図2）し、それを見せながら会話を進めた。



図2 白黒テレビの写真

「ライフレビューブック－高齢者の語りの本づくり－」  
（志村，2009）より転載

「テレビには脚がついていた。」「白黒やった。」「放送時間が限られとった。」等、当時のテレビの特徴を語るとともに、「若い季節（NHK）。黒柳徹子が出とった。」「バス通り裏（NHK）。十朱幸代が出よった。」「月光仮面の実写版もありよった。昭和33年頃やったかな？」と、当時放映されていた番組名や出演者、放映時間等が次々と思いだされたようだった。さらに、テレビを見ている時の状況も詳しく説明された。テレビは自分が見たい時に見ていたというよりは、ほぼ1日スイッチがついており、自分では操作できなかったこと、それまでいつも母親と一緒に過ごしていたのが、テレビが入ったこと

により、自宅に一人で過ごす時間が増えていったこと等も語られた。さらに、昼間はほとんど一人でテレビを見ていたのに対して、夜のテレビは、「兄貴と一緒に家族と一緒に見ていた。」という日常的な情景や、「近所の人も時々来よった。西鉄の試合もありよった。あの頃強かった。高倉とか中西とか関口・仰木・玉造とかおった。豊田も稲尾もおった。」等の強く印象に残る記憶も蘇り、テレビを通じて家族や近所の人との交流の場にもなっていたこと等が語られた。

b. 第2回想

20XX+4年1月21日に途中休憩をはさんで90分間行った。最初に前回の回想の時間には思い出せなかった当時見ていたテレビ番組のことを、「まだ見よったのがあった。『白馬童子』、時代劇で『風小僧』、あと何かあったかなあ…？」と、自分から語り始め、前回同様、回想を行うことを楽しみにしている様子が見られた。今回の回想では、一人で家にいるようになった時期はテレビ購入後の「昭和33年頃かなあ…？」、テレビがない頃は、「まず一人になることはなかった。小さかったから…。」というように、家にテレビが入ったことで、自分自身の生活がそれまでとは大きく変わっていったことが語られた。「テレビがあったけん、別にさみしいとは思わなかった。」「一人で（家に）おることがあるけん、（テレビは）自分の相手になってくれていた。」と、昼間は家族が誰もいなくても、テレビを見て寂しさを紛らしていたことが伺えた。しかし、その一方で、日中一人になると、「とにかく、トイレが困った。」「おしっこを漏らしたことがあった。」というように、介助が必要な場面での新たな課題が生じていたことも語られた。それでも「生活の中でテレビは重要で

表4 回想により思い出されたテレビ番組

番組名	放映期間	放映日時	放映テレビ局
○若い季節	1961年4月9日～ 1964年12月27日	毎週日曜 20時00分～20時45分	日本放送協会（NHK）
○バス通り裏	1958年4月7日～ 1963年3月30日	月～金曜 19時15分～19時30分 （※1960年4月～土曜にも放送）	日本放送協会（NHK）
○白馬童子	1960年1月5日～ 1960年9月20日	毎週火曜 19時00分～19時30分	日本教育テレビ（NET） （※現・テレビ朝日）
○風小僧	1959年2月3日～ 1959年12月29日	19時00分～19時30分	日本教育テレビ（NET） （※他局でも放送）
○月光仮面	1958年2月24日～ 1959年7月5日	月～土曜 18時00分～18時10分 日曜 18時00分～18時30分	KR テレビ （※現・TBS テレビ）
○事件記者	1958年4月3日～ 1966年3月29日	毎週水曜 21時00分～21時30分 （※1960年4月～火曜枠で放送）	日本放送協会（NHK）



したか？」という問いには、「自分の中では大きかった。」と力強く答えていたのが印象的であった。最後に、年度別のテレビ番組欄（表4）を活用し、覚えている当時の番組を一緒に確認して、その日の回想を終了した。

c. **第3回回想**

20XX+4年1月23日に休憩を入れずに90分間行った。はじめに、前回までの振り返りを行った上で、引き続きテレビに関する話題を取り上げた。テレビについて、「(昼間は)一人で見るが多かった」、「退屈せんで良かった」、「トイレが困った」等、前回の回想と重なる内容が語られる一方で、「お袋におんぶされてあちこちに行きよった。」、「自分が大きくなり重くなって、お袋がおんぶしきらんで言ったから…」というように、テレビが入る以前の生活の一端が母親との思い出とともに新たに語られた。また、「(テレビは、朝)お袋がつけていきよった。」、「布団の中に寝た状態で見ていた。暑いときは扇風機がついとった。風がすぐぬくくなりよった。暑かったことを覚えている。」、「昼は(番組が)ありよらんやったけん、半日間くらいは(テレビが)「ジャー」ちいいよった。」等、具体的場面での詳細な状況やその時の気持ち等がわかる内容が多かったことも、今回の回想の特徴であった。さらに、回想の後半では、それまでのテレビの話題から、急に「昭和34年頃、親父のお父さんが家に遊びに来た。夜トイレに行った時、倒れて…。脳溢血やった。」というように、祖父の話題へと変化した。その後も、「爺ちゃんは意識がなかった。1ヶ月か2ヶ月後に死んだ。」、「家で亡くなったのは確か。冬やった。」というように、しばらく祖父に関する回想が続いた。E市に住んでいた1950年代後半(昭和32年～35年頃)の思い出が他にないか尋ねると、「テレビのことで爺ちゃんのことが特に印象に残っている。」という回答がなされた。テレビがAの生活に大きく影響を与えた一方で、祖父の死も大きな出来事だったことが窺い知れた。回想の終わり際には、親戚関係の記憶等も沢山蘇ったようだった。時間の関係で終了せざるを得なかったが、回想の広がりを感じさせる回となった。

**②展開期(第4回：20XX+4年1月27日～第9回：20XX+4年2月13日)**

第4回から第9回までの回想は、展開期として位置付けられる。主に「家族との関係」に焦点を当て

て、本人及び姉により提供された写真(家族と二人または三人で撮影された少年期のスナップ写真)等も活用しながら、父・母・兄・姉一人一人との思い出が振り返られた。

a. **第4回回想**

20XX+4年1月27日に75分間行った。はじめに、姉に用意していただいた6枚の写真(①ふすまの前に一人で座っている写真、②笑顔でアップの個人写真、③後ろから女性が抱きかかえて立っている写真、④女性におんぶされている写真、⑤部屋の中に一人で座っている写真、⑥男性と女性と一緒に三人で写っている写真)を順番に見ていきながら当時のことを想起した。写っている情景等を頼りに、それぞれの写真の時期や場所を振り返ろうとしていたが、「これはB市の自宅じゃないかなあ?いや、やっぱりE市に住んでいた頃かなあ?」、「昭和42年頃の写真じゃないかなあ?でも、お袋と写っているのなら8歳か9歳の頃かなあ?」というように、いずれもはじめて見る写真のためか、十分には特定できない様子が窺えた。それでも、④の写真には、「お袋におんぶされている。いつ頃かはわからんけど…。」、⑥の写真には、「女性はお袋じゃないごたる。顔が違う。男性は親父に間違いない。」というように、両親の写真に関しては、自信をもって見分けることができていた。なお、後日姉に連絡を取り、⑥の写真に写っている女性は姉自身であったことが判明した。

さらに、本人が持参した2枚の写真(⑦一人で縁側に座っている写真、⑧学生服を着た男性に身体を支えられながら一緒に立って写っている写真)も活用した。特に、⑧の写真を見ながらの回想では、「兄貴が中学生の頃の写真のようだ。」というように、その時期の兄自身のことを説明するとともに、「家の裏に柿の木があった。その柿を食べよった。富有柿やったけん、食べることができた。棒を使って柿を採りよった。」というように、背景として写された庭の情景に伴うエピソードも具体的に語られた。

b. **第5回回想**

20XX+4年1月30日の10分間行った。前回回想に引き続き、自宅前の庭で兄と一緒に写した写真を見せながら、「この頃のお兄さんとの思い出は何かありますか?」と尋ねてみた。しかし、それに対するAの回答は、「この頃、犬を飼っていた。犬の名前はチビやった。」から始まり、「一緒に遊びよった。」、「顔をなめられた。」、「庭に犬小屋があった。親父



か兄貴が作った小屋やった。],「玄関まで犬は入ってきたよ。」というように、兄の話題ではなく、当時飼っていた犬の話題で終始会話が展開された。最終的に「犬を飼っていたことは今思い出したのですか?」という質問には、「前から覚えとった。思い出の話になったので話そうと思った。」と回答し、その日のテーマからはずれたものの、その時本人が話したいと思った犬のことを話題にしたことにより、10分間という短時間の回想にも関わらず切れ間なく会話が進むことになった。

#### c. 第6回回想

20XX+4年2月6日に休憩を挟んで50分間行った。両親との思い出を想起しやすくするために、開始時に「今日はお父さんとお母さんのことを伺いたいのですが、最初にお母さんの思い出を聞かせてください。」と伝え、母の背中におんぶされている写真を見せながら、「何か印象に残っていることや覚えていることはありますか?」と尋ねてみた。それに対するAの回答は、「家の前に工場があった。何かを作ってた。」「醤油の醸成所やった。」「醤油のおいしがしていたが、しばらくすると建築材料を作るところに変わっていった。」というように、写真の背景に写されていた家の周りの情景を見て、前回同様に当初のテーマから話題がずれていった。そこで、一旦そこまでの内容をAと一緒に確認した上で、今回のテーマにこだわらずに、しばらく回想を続けた。

Aが話したかった話題がある程度収束されたところで、再度母親と二人で写った写真を見せて、「お母さんのことで覚えていることはありますか?お母さんはAさんをおんぶしているようですが…。」というように、本来のテーマに沿った質問をすると、今度は「いくつの頃かなあ?」と関心を示し、以降は母親との思い出がスムーズに語られた。「写真に『昭和40年5月の思い出』と書いてありますが…」と伝えると、「俺は14歳。お袋は42歳の頃かあ…。」と呟いて感慨にふけり、「E市に住んでいた頃はおんぶされよった。」「おんぶされて、あちこち行ったことを覚えている。」「昭和28年から35年くらいまではおんぶしてもらって行きよった。」というように、母親と行動を共にした頃の話題が楽しそうに語られた。さらに、「外には、だんだん行かんごとなった。」「いつも一人でテレビを見よった。」というように、成長していく過程で活動する場面や内容に変化が見られるようになったことを振り返る機会

にもなった。

「その頃、車椅子は持っていなかったのですか?」と質問すると、「2000年頃に車椅子ははじめて作った。」「1999年に親父が亡くなった。親父が亡くなる2ヶ月か3ヶ月前に作ったと思う。」という回答がなされ、以後回想内容が父親に関する話題へと転換されていった。「(父親の具合が悪くなってから、)ヘルパーが来て自分をお風呂に入れてくれるようになった。」「親父が亡くなってからはショートステイも利用するようになった。」というように、父親の体調悪化や死を契機に自分自身の生活も大きく変化したことが語られた。さらに、父親は自宅静養をしていたこと、吸引器を付けた生活が必要となりAと同じヘルパーを利用するようになったこと、最後は自宅から救急車で搬送されて病院で亡くなったこと等についても詳しい説明がなされた。そこで、「お父さんの記憶としては、亡くなった時のことを一番覚えているのですか?」と尋ねると、「亡くなる時の記憶ははっきり覚えている。」という返答がなされる一方で、「親父はあちこち転勤することが多かったけん…。」「E市とF市には一緒に引っ越した。それ以外は単身赴任やった。」という父親との少年時代の生活の記憶を振り返ることにもつながった。さらに、「どうしてお父さんでしたか?」という問いには、「お袋は厳しかったけど、親父はあんまり怒らなかつた。」というように、母親と比較しながら父親の性格も語られた。「お父さんとの楽しい思い出はありますか?」という質問には、「昔、家でお餅をついていた頃のことを覚えている。」「親父と兄貴、親父の弟とか親戚も来ていたような気がする。」「俺はこたつに入って様子を見ていた。」というように、印象に残る父親の姿を想起しながら、当時の家の中での生活の様子や、家族・親戚等とかかわり合う場面の情景が具体的にイメージできる回想となった。

#### d. 第7回回想

20XX+4年2月10日に65分間行った。前回に続き、「父母との思い出」をテーマとした。Aは前回の回想後、その時思い出せなかったところや気になったところを姉と確認し合っており、今回の回想が開始されるとすぐに、「自分が覚えていた日にちが間違っていた。」と言って、父親の最初の入院期間及び状態悪化により救急車で搬送されてから亡くなるまでの期日の訂正を申し出てきた。「他にはお父さんの話はないですか?」と尋ねると、「今のと

ころは、特にない。」という回答がなされ、以後母親との思い出に絞って回想を継続した。

母親との思い出では、「お袋は、小さい頃は厳しかった。原因は覚えとらんけど、1回か2回は押し入れに入れられたことを覚えている。」というエピソードが、「E市に住んでいた時やったから7歳か8歳の頃。」「はっきり覚えている。怖かった。一時してお袋が出してくれた。」等の具体的な情景やその時の気持ちと共に語られた。また、「母親におんぶされよったことは覚えている。11年間くらいはおんぶされとった。」「外に行く時も、お袋がおんぶして出かけよった。」というように、前回同様、母親と一緒に行動していたことが想起された。「お母さんが全くおんぶしなくなったのはいつ頃ですか？」と尋ねると、「俺が大きくなって、おんぶしきらんと言われた。昭和36年頃かなあ…？」という回答がなされるとともに、母親がおんぶをしなくなった頃から一人でテレビを見て過ごす時間が増えていったことや板で作られた乳母車に乗って庭や家の前の通りまで押してもらっていた記憶も蘇った。さらに、楽しい思い出として「家族で汽車に乗った記憶がある。」「富士山の近くまで行った。」「汽車の煙が煙たかった。においや音も覚えている。」というように、五感全体で体感した体験等についても語られた。

一方、「お母さんと二人だけの思い出はありますか？」という質問には、「普通の生活やったけん、はっきり覚えとらん。」という反応が返されたものの、「(お母さんとの)普通の生活について聞かせてください。」と尋ねると、「まず、朝起きたらトイレに連れて行ってくれた。それから顔拭き。その後、ご飯を食べさせてくれた。」「お袋は掃除、洗濯をしていた。自分の部屋は反対にあったから、洗濯している姿はわからんやったけど、掃除の時には雑巾がけ、廊下拭きをする様子は見よった。」というように、小さい頃から毎日継続されていた母親とのかかわり合いや当時の具体的情景等が詳しくわかる振り返りがなされた。

#### e. 第8回回想

20XX+4年2月12日に20分間行った。今回から兄や姉との思い出が想起された。最初に「お兄さんやお姉さんのことで、特に印象に残っていることを教えてください。」と尋ねると、「昭和30年代後半頃、兄貴とは将棋をしょった。こたつに入ってしょった。」「兄貴が駒を動かしょった。自分はよくわか

らんやったから、兄貴が俺の分も動かして教えてくれよった。」と、これまでの回想ではあまり語られてこなかった兄との関係性が、少年期の具体的なエピソードとして紹介された。さらに、「お兄さんと一緒に遊んだ記憶はありませんか？」という質問には、「あまりないけど…。小さい頃のことは、あまり覚えとらん。」という回答とともに、兄からきつい一言を言われたことがあるという体験も含めて、「兄貴との思い出には、あまり良い思い出はない。」という感想が述べられた。また、兄は母親との間にもいろいろなわだかまり等があったようで、その件については「話しにくい。」と言ってあまり話したくない様子だった。しかし、Aは、「兄を恨んではない。」とも言っている。「お兄さんにはどんな気持ちを抱いていますか？」という問いにも、「可哀想だと思っている。酒飲みすぎて身体こわしたから…。」と応えるなど、兄のことを思いやる姿勢が示された。

#### f. 第9回回想

20XX+4年2月13日に55分間行った。姉との思い出が想起され、小さい頃から現在に至るまでの印象に残る出来事や姉に対する思い等が語られた。父親・姉と三人で写っている写真を見せながら、「今回はお姉さんのことを伺います。昭和40年にお父さん、お姉さんと一緒に写真を撮っていますが、この頃の思い出はありますか？」と質問すると、「俺が15歳か16歳の頃やけん…」と言いながら、B市の自宅でのかかわりや出来事を振り返ろうとする様子が窺えた。特に、姉が高校生の頃の話として、自宅に一人でいたAが着替えに困っていると、近くの高校に通っていた姉が帰宅した時に何度か替えてもらったという日常的なエピソードが紹介された。また、「お姉さんのことで特に印象に残っていることはありますか？」と尋ねると、「結婚式。」と応え、「花嫁衣装を家で着た。」という言葉に実感がこもり、その時の情景が思い浮かぶようであった。しかし、その一方で、「俺は結婚式には行っとらん。」と言いはじめ、続けて「親父の葬式にも行っとらん。兄貴の結婚式にも行っとらん。お袋の葬式には施設の職員と一緒にいった。兄貴の葬式は遠かったけん、行っとらん。」というように、身内の結婚式や葬式といった節目の日でさえ参加することが制約され、難しかったことに対する当時を振り返っての思いが一気に語られた。

「お姉さんが花嫁衣装を着た時はどう思いました

か？」という話題に戻すと、「はっきり覚えとらん。相手の人は前から知っていたので安心してた。」という回答が返ってきた。その後の回想でも、しばらくは姉が結婚して以降の家族ぐるみの付き合いの様子や姉との関係について語られた。「姉の家（結婚後の自宅）は車で5分くらいのところだった。結婚してから時々来よった。」というように、結婚前と変わらないような自然体での付き合いが継続され、姉とは結婚後も良好な関係が保たれていたことが窺い知れた。さらに、「お姉さんと一緒にやっていたことで思い出すことなどはありませんか？」という質問には、「家に仏壇があった。一緒にお参りをしよった。」という反応が返ってきた。その後、前回までの回想ではあまり触れたがらなかった「家族と宗教」に関する内容について自分から話題にする場面も見られた。

父・母・兄・姉という一人一人に対する振り返りを終え、改めて「家族」について尋ねてみた。四人で一緒に過ごすことに関しては、「あまりなかった。」と言いながらも、「毎日の生活が普通だった。」ということが語られた。そこで、当初本人が回想してみたいと思っていたE市に住んでいた頃の毎日の生活を振り返ることにした。1日の流れに沿って家族の動きを想起した(表5)ことにより、家族一人一人の生活の一端や具体的な姿を思い浮かべることができる回想となった。

このように、展開期では、少年期に住んでいた家及び周辺の様子や印象に残る出来事等と併せて、少

年期から成人して以降までの「家族との関係性」等について語られ、今でも葛藤する気持ちが一部残されているものの、回想を通して徐々に整理されつつあることが示された。

### ③ 発展期 (第10回：20XX+4年2月17日～第11回：2月21日)

第10回と第11回の回想は、発展期として位置付けられる。日常のくらしの中で家族全員が揃って一緒に活動した場面等を想起することにより、家族一人一人との関係性が捉え直された。また、小さい頃の兄や姉を通して抱いていた学校のイメージとともに、これまでA自身が持ち続けてきた学校に対する思いや友だちの存在等を振り返りながら、回想法に取り組んだことによる気持ちの変化と、これからの目標としたい思い等について語られた。

#### a. 第10回想

20XX+4年2月17日に60分間行った。前回回想に引き続き、「家族」としての話題に焦点を当て、最初は家族が帰宅する頃の様子を聞いてみた。兄や姉の高校時代のB市自宅における夕方の様子が想起された。兄や姉は高校が近かったので帰宅時間も早く、本を読む兄や時々御飯の用意をする姉の姿が印象に残っているようだった。母親は大体夕方4時半か5時頃には帰っていたこと、夕食は母親が用意することも姉が用意することもあったこと、夕食はいつも母、兄、姉の三人と一緒に食べて、その時Aはテレビを見ていたこと等が振り返られた。「夕食はみんなより先に食べることもあったし、後から食べ

表5 回想により想起された家族の1日 (1950年代後半頃)

時間帯	対象者	具体的な行動, 活動の内容等
① A.M. 6:30頃	自分	朝起きて、母親にテレビをつけてもらう。
② A.M. 8:00頃?	父	家を出る。(仕事に行く。)
③ A.M. 8:30頃?	兄・姉	家を出る。(学校に行く。)
④ A.M. 9:00頃?	自分・母	一緒に朝ご飯を食べる。(母親に食べさせてもらう。)
⑤ 朝食終了後	母	炊事・洗濯を始める。
⑥ A.M. 10:00頃?	自分・母	一緒に仏壇の前に座る。
⑦ A.M. 11:30頃	自分・母	一緒に昼ご飯を食べる。(母親に食べさせてもらう。)
⑧ P.M. 0:30頃	母・(自分)	出かける。(一緒に行くこともある。)
⑨ P.M. 3:30頃～	母・兄・姉	帰宅する。(帰ってくる順番はその日によって異なる。) ※P.M. 4:30頃までには誰かが帰ってきた。
⑩ P.M. 5:30頃	父	帰宅する。(早い時の時間帯) ※遅い時はP.M. 11:00頃になっていた。

? : 当時の正確な時間帯が不明なもの



ることもあった。」というAの説明に対して、「家族と一緒になくて寂しくなかったですか？」と尋ねたところ、「それは思ったことがない。」「習慣になっとなつたけん。」という反応が返された。このように、回想内容をお互いに確認し合うことにより、食事介助等を必要とするAの場合、家族が別々に食事をすることは日常的に定着していたことであり、特別なことではなかったことを窺い知ることができた。

その一方で、「いつも食事は別々だったのですか？」という質問に対しては、「お正月は一緒だった。」という回答がなされ、しばらく正月の楽しい思い出や印象に残っている情景等について語られた。「こたつを囲んで食べていた。」「鉢盛やったのを覚えている。」「お袋が雑煮を作ってくれた。」「こたつの上には、料理、鉢盛、お酒、とっくり、おちょこがあった。」というように、日常とは異なる特別な食事場面として、印象深く記憶に残っているようだった。正月の話題では、食事場面に限らず、様々な場面や情景を思い起こすことができた。「『明けましておめでとう』を家族で言い合った。」「お屠蘇は親父が最初に飲んだ。次に兄貴だったかなあ。それからお袋、そして姉だったかなあ…。」というように、家族としてのまとまりが感じられる回想がなされた。また、「年始の挨拶に来るお客さんが多かった。」「親戚の人はお年玉をくれていた。親父とお袋からももらっていた。」というように、正月特有の人とのかかわり合いや楽しみなども具体的な場面や情景と共に思い出すことができた。

正月の話題が収束したところで、再度日常の生活場面に話題を戻し、「夕食後は、それぞれ何をしていたのですか？」と、家族の動きを尋ねてみた。「兄貴は勉強しよった。姉も勉強しよった。自分はテレビを見よった。」というように、それぞれが自分の活動に取り組む時間がある一方で、「親父が早く帰ってきたら、風呂に入れてくれよった。」「お袋か姉が風呂場まで迎えに来て、自分の部屋まで連れて行ってくれた。着替えさせてくれるのもお袋か姉やった。」というように、毎日繰り返される生活場面の中での具体的な姿や情景等を回想することにより、家族一人一人がお互いに協力し合いながら、Aとも日常にかかわり合っていたということをわかりやすく説明することができていた。

#### b. 第11回回想

20XX+4年2月21日に75分間行った。回想の最終日を迎え、これまでの回想では十分語れなかった

学校や勉強、友だち等のことが話題となり、「家族」以外の人とのかかわり等で印象に残っていることや学校に行けなかった少年期から現在に至るまでの思いや考え等が想起された。また、実際に学校での勉強や回想法に取り組んだ意義を振り返り、今後の目標を明確にする機会となった。

はじめに、Aに自分が今の中学生の年齢（12歳から15歳）の頃、きょうだいが学校に行っていたことをどう思っていたか尋ねると、「小学校から自分行つたらんから、なんとも思わんやった。」という回答がなされた。当時の兄や姉とも学校の話あまりしたことはなかったようだが、学校は「勉強をするところ」というイメージが強かったということであった。しかし、昔の風景や道具類を写した写真集の中から学校の風景や様子を見せながら、「その頃学校に行きたいとは思いませんでしたか？」という質問をすると、「思つたこともある。」「勉強したいと思っていた。」というように、当時抱いていた「自分も学校に行つて勉強したい。」という強い思いが語られた。

また、「その当時友だちはいましたか？」という質問に対しては、「親同士が知り合いだったところの女の子がいた。自分と同じ脳性麻痺やった。」「時々会いよった。でも、その子は早く亡くなった。」「(話したことも)あったと思うけど、覚えとらん。」というように、友だちとまでは言えないものの、当時かかわりのあった同世代の子どものことが具体的に語られた。しかし、「友だちを欲しいとは思いませんでしたか？」という問いには、「思っていなかった。」「どうやってかかわっていいかわからんけん、その頃会っていたとしても、どうしていいかわからんやったやろう。」というように、日頃一人または家族だけで過ごす時間がほとんどであったAにとっては、家族以外の人との人間関係を形成したりコミュニケーションを図ったりすることは簡単なことではなく、人とかかわり合うことに十分自信がもてなかったことが垣間見える返答がなされた。

学校には行けなかったものの、「テレビからの情報でいろいろ覚えた。」「家族には、勉強のことは『教えて』とも言わなかったし、教えてもくれなかった。」「平仮名も漢字もテレビで覚えた。テレビを見ていればわかる。」というように、家庭にテレビが入って以降、テレビを見ながら一日の大半を過ごす生活を繰り返す中で、自然と学習面での力が身についていったことが示唆されるエピソードも紹介さ



れた。それでも、「学校に行って勉強したい。」という思いはもち続けていたこと、同じ施設の利用者が学校に行くようになりその思いが益々強くなっていったこと、その思いを施設の職員に伝えてから実現するまで2年間待ち続けたこと、実際に学校に行けるようになったと聞いた時には本当に嬉しかったことなどが詳しく語られ、これまでの経過に沿った気持ちの変化がわかる振り返りがなされた。実際に学校に行けるようになり、「(小さい頃イメージしていた学校と) あんまり違わんやった。」「いろんなことが覚えられるし、経験できる。」「スクーリングでいろんな人に会えるところも良かった。」等の実体験を通して思ったことや考えたことも整理しながら語ることができていた。

授業の中で回想法に取り組んだことについては、「いろんなことを思い出して良かった。」「昔のことを振り返って、考えることがあった。」「懐かしいという気持ちや悲しかったという気持ち、うれしいという気持ちがある。」というように、当時を振り返っての現在の心境がわかりやすく表現された。さらに、「これからのことで思うことはありますか?」と尋ねたところ、「あと5年は学校に行きたい。高校までは行きたいと思っている。」「中学で1年間勉強して、まだ勉強を続けたいと思った。」というように、今後の目標に対する明確な意思表示がなされた。最後に、これですべての回が終了したこと、この間いろんな話を聞かせていただいたことに筆者が感謝していること、次回からはライフレビューブックの制作に向けた準備を進めていくこと等をAに伝え、約1ヶ月に渡り計11回実施された個人回想法の取組は終了した。

### (3) 回想法の取組を終えて

全11回の回想法終了後は、ライフレビューブック作成に向けた取組へと発展し、3学期の残りの授業でも、その後の方向性について構想が練られた。本格的な取組は次年度の体制等が確定された後に、改めてAと筆者とで検討されることになったが、本のタイトルは「思い出と今」とすること、表紙には昔と今の写真を並べて掲載すること等が決定した。

20XX+4年3月20日には、入所している施設でAの中学部第1学年修了式が行われ、1年間の授業のまとめとして、Aに通知票と修了証書が手渡された。通知票には、3学期の自立活動の評価や総合所見として、回想法やライフレビューブック作成に関する内容等が記載された(表6)。

修了式当日には、中学1年生を振り返ってのAの思いが掲載された「新聞」第4号が発行された(表7)。「新聞」は、式への出席者にも配布され、式の中でAの挨拶が行われる際に活用された。

さらに、3月末には筆者とAとで再度確認し合いながら、年度当初に策定された個別の教育支援計画に基づく年間評価も行った(表8)。

## 3. 考察

本研究は、60歳を過ぎて特別支援学校中学部に入学した学齢超過者Aに対して担任としてかかわった訪問教育において、高齢者の心理療法として活用されている回想法を実施し、その取組の経過をまとめ、成果と課題を明らかにすることを目的とした。実施に当たっては、1対1のコミュニケーションを大事にするために、自立活動の時間を活用し、計11回、個人回想法を取り入れた。回想の内容や様子を毎回文章化し、授業の経過に伴う変容やかかわりの中で

表6 3学期通知票による評価(自立活動及び総合所見)

3学期の評価	
自立活動	昔の写真やテレビ番組をもとに、小さい頃の家族のこと、住んでいた場所のこと、1日の生活の様子、テレビをはじめ購入した時の生活の変化等を想起し、伝えたいことを自分の言葉でたくさん語ることができました。聞き取った内容とともに、学校のことやこれから伝えたいこと等も項目ごとに整理し、「思い出と今」というタイトルの自分だけの本：ライフレビューブックの作成にも取り組みました。
総合所見	今年度の目標の一つである「より良いコミュニケーションの図り方、言葉や思い・気持ちの伝え方を学ぶ」は、スクーリングでの直接交流から、「新聞」の発行、ライフレビューブックの作成へと広がり、ほぼ達成することができました。次年度は、さらにより良いコミュニケーションが図れるよう期待しています。

表7 1年間で振り返ってのAの思い

<p>中学1年生を振り返って</p> <p>4月 中学部に入学しました。緊張していたけど、うれしかったです。</p> <p>1学期は運動会に参加しました。リレーで競争するのが楽しかったです。</p> <p>宿泊学習もありました。外で泊まるのは初めてでしたが、夜のレクリエーションが良かったです。</p> <p>教科書を使った勉強も行き、数学ではお金の計算など生活にかかわることを学びました。</p> <p>夏休みには、ゲストティーチャーにも来てもらい、社会・家庭・国語の勉強をしました。</p> <p>2学期はたくさんの校外学習や行事に参加しました。</p> <p>10月 駅に新幹線を見に行きました。地区の音楽会にも参加しました。</p> <p>11月には交流教育や学習発表会もありました。「新聞」も発行することになりました。</p> <p>3学期は演歌歌手の「コンサート」や卒業生を送る会への参加、ボウリングの体験もしました。</p> <p>さらに、自分自身の「思い出と今」というタイトルの本作りに取り組み、昔のことを振り返り、整理しているところです。</p> <p>1年間いろいろな経験をして、たくさんを知ることや覚えることができました。</p> <p>スクーリングでも多くの友だちや先生から声をかけてもらい、うれしかったです。</p> <p>何人か友だちもできました。2年生では、これまで以上に多くのことを勉強して、友だちもさらに増やしていきたいと思っています。</p> <p style="text-align: right;">※ 「新聞」第4号(20XX+4.3.20.発行)より</p>
---

表8 個別の教育支援計画に基づく年間評価

評	価	20XX+4年3月 作成
学校で立てた目標について(学校から)	施設で立てた目標について(本人から)	
○欠席もなく、多くの校外学習・行事等に参加できた。スクーリングでの直接的なかかわり合い、自作「新聞」のクイズでのやり取り等を通して、より良いコミュニケーションの図り方、言葉や思い・気持ちの伝え方を学ぶことにつながった。	○スクーリングでは中学部の友だちと実際にかかわり、メッセージカードや年賀状もやり取りして仲良くなった。人と話をするには、相手の言うことをよく聞くこと、自分の言葉をはっきり言うことの両方が大事だとわかった。	

の気付きをもとに評価・分析を行った。その結果、回想を重ねることにより、導入期、展開期、発展期に分類・整理され、話題や会話の内容も変化していくことが明らかになった。これらの結果をもとに、高年齢の学齢超過者の訪問教育で回想法を活用した授業に取り組む意義について、3つの視点から考察する。

### 1) 教育的視点における意義

特別支援学校高等部専攻科における授業実践から「青年期らしい授業のあり方」を整理した渡部(2009)は、青年期らしさを意識した教育内容、題材、タイトル、授業構成と展開、評価活動の必要性について述べている。60歳を超えるAを対象とする本研究では、高年齢期らしい訪問教育の授業のあり方を意識して取組を進めた。渡部を参考にして、高年齢期らしい教育内容、題材、タイトル、授業構成と展開、評価活動という視点から、Aに対する回想

法の取組を整理してみたい。

高年齢期らしい教育内容に関しては、年度当初から回想法の取組が計画されていたわけではない。Aの授業に取り組むに当たっては、Aは筆者よりも人生の先輩であり、他の中学生と同じような対応をすることでAの自尊感情が傷つけられないように配慮した。常に尊厳を持ち、むしろ筆者自身がAから学ぶ姿勢でかかわることを心掛けた。個別の教育支援計画もAと一緒に策定し、「日本語をより正確に理解し、はっきり使えるようになってほしい。」という教育への期待(表1)や「より良いコミュニケーションの図り方、言葉や思い・気持ちの伝え方を学ぶ。」という年間目標(図1)に沿って内容が検討された。できるだけ、本人の意向を尊重し、最初は国語の教科書を活用した授業が中心であったが、スクーリング等で学校の生徒や教師との直接的なかかわりを重ねる中で、「多くの人に自分のことを知ってほしい」という思いが強くなり、行事や式での挨拶

抄文の作成や「新聞」の発行、ライフレビューブックの作成に向けた回想法の実施へと発展していった。

志村(2005)は、高齢者に対する一般的な回想法の効果として、対人的な相互作用やコミュニケーション行動を挙げており、回想法は高年齢期らしい題材として期待される。Aの訪問教育授業においても、本人の理解を得た上で、3学期からの回想法の導入が決定し、実践された。Aの場合、「テレビ」、「家族」、「学校への思い」等に関する話題を取り上げて回想を進める中で、様々な成果がみられた。特に、テレビに関する回想については、第1回から第3回までの導入期には、Aが最も昔のことで振り返りたい、話したいと思っていた話題として実施された。最初は思い出のテレビ番組を振り返ることに意欲的で、回想の時間内には思い出せなかった番組名や内容についても、授業を終えてから思い出すと、次回の授業開始時には自分からその内容について語り始めるなど、主体的に活動に参加する姿が見られた。また、当時家にテレビが入ったことで、常に行動を共にしていた母親との関係が大きく変化し、一人で家の中で生活する機会が増えていくなど、成長過程での母子分離に発展していくきっかけになったことも回想により推察された。Aは一人で家にいた時の気持ちを尋ねられ、「テレビがあったけん、別にさみしいとは思わなかった。」と回答しており、テレビが入ったことでAも一人での時間を楽しむようになり、家族もAを一人残して出かけられるようになったことが窺える。「トイレが困った」というエピソードはそういう中で新たに生じてきた問題であったと言えるだろう。さらに、同じテレビに関する話題でも、回想を重ねるごとに、具体的な内容や当時の情景、登場人物とお互いの関係性、抱き続けた思い等をより伝わりやすく説明できるようになっていった。特に、発展期の第11回回想では、「テレビからの情報でいろいろ覚えた、」、「平仮名も漢字もテレビで覚えた。」というように、テレビは就学できなかった頃の学校や教師の役割も担っていたことが示唆されるとともに、「学校に行って勉強したい。」という思いを抱き続けていたことが語られ、改めてその思いの強さを認識させられた。

高年齢期らしいタイトルについては、毎回Aに対する回想を始める際は、「今回も、テレビの話しましょう。」、「今回から、お兄さん、お姉さんのことを伺います。」というように、その日回想する主なテーマを導入として言葉でAに伝え、本人が少し

でも見直しをもって回想に取り組めるよう配慮した。できるだけ回想が広がるように、最初から詳細なテーマを準備するのではなく、むしろ毎回の回想を終えてから、その日の回想内容にふさわしいタイトルを付けることにしたのだが、当初予定していたテーマからはずれた回想が展開されることもあった。第5回回想では、兄との思い出を語ってもらうために兄と一緒に写っている写真を準備し、「この頃のお兄さんとの思い出は何かありますか?」と尋ねたところ、写真の背景に写っている庭を見て、当時飼っていた犬の話がしばらく続き、第6回回想では、母親の背中におんぶされている写真を見せながら、「お母さんの思い出を聞かせてください。」と尋ねたところ、母親のことではなく、写真を写した自宅周辺の様子が詳細に語られることもあった。思い出には、自然に思い出されることと何かをきっかけに思い出すことがあり、第5回・第6回の回想は、手掛かりとして写真を活用したことが、新たな記憶を引き出すことになったものと考えられる。一方、第10回の回想では、家族の日常的な1日の行動を振り返る中で、正月という特有の時間・場面での家族との関係性を想起することにもつながった。その結果、第5回タイトルは、「家族と一緒に写った写真を見ながらの思い出②」、第6回タイトルは、「自宅周辺の思い出・父母との思い出①」、第10回タイトルは、「1日のくらしの様子・正月の思い出」というように示された(表3)。なお、回想法の取組を終えて新たに開始されたライフレビューブックの作成においては、「思い出と今」というタイトルが確定している。

高年齢期らしい授業構成と展開については、導入期、展開期、発展期と回想を重ねるごとに、内容が深まり、整理されていった。導入期の頃の回想では、当時の出来事や場面・情景の説明が中心であったのに対して、回想が進むにつれ、展開期には、当時の自分自身の思いや家族一人一人と自分との関係性が話題として含まれるようになっていった。第6回回想では、特に父親が倒れて亡くなるまでの内容がもっとも多く語られ、その時の緊迫感や状況がしっかり伝わるような説明がなされた。また、父が倒れたことがきっかけで、自分自身も福祉サービスを利用するようになり、その後現在の施設利用につながっていくようになった経緯がわかる回想となった。母親との思い出が語られた第7回回想では、母親と過ごした時間が最も多かったためか、父親との思い出よりも母親との思い出のほうがより具体的であり、



挿入れに入れられた時の様子などエピソードもユニークである。日常のかかわりについても生活感があふれる振り返りがなされた。さらに、発展期には、家族としてのまとまりや知り合いとのつながり、当時を振り返った上での現在の思い等も語られるようになっていった。展開期として整理した第9回回想では、毎日の普通の生活を時系列に沿って振り返る(表5)ことにより、家族一人一人の生活の一端や具体的な姿を思い出すことにつながったが、発展期として位置づけた第10回回想では、「母や姉に風呂場に迎えに来てもらって、自分の部屋まで連れて行ってもらい、着替えさせてもらった」というように、さらに家族との関係性の中での生活の様子が具体的に語られ、家族の生活の様子もより具体的な姿として説明されるようになった。第11回回想では、「小さい頃の友だちの思い出、学校に対する思い、これからの思い」が語られた。家族以外の人との関係については、親戚との付き合いはあるものの、学齢期に学校に行っていなかったこともあり、同世代との日常的なかかわりがほとんどなかったということが明らかとなった。しかし、当時から、「学校に行きたい」という思いは抱いていたことが語られた。学校のイメージは「勉強するところ」であり、「友だちは欲しいとは思わない。どうかかわっていいかわからない」と表現されたことが印象的であった。最終回の回想により、自分の気持ちがある程度整理され、今後の目標が定まり、意思表示することにもつながる等の教育的成果も示された。

高年齢期らしい評価活動については、担任としての筆者による評価と共に、A自身による振り返りや評価が重視されている。回想法に取り組んだことに関しては、最終回となった第11回回想の中でも「昔のことを振り返って、いろんなことを思い出して考えることがあった。懐かしいという気持ちや悲しかったという気持ち、うれしいという気持ちがある。」というようにA自身も評価している。その一方で、1年間を振り返って作成した「新聞」第4号の挨拶文(表7)には、「自分自身の『思い出と今』というタイトルの本作りに取り組み、昔のことを振り返り、整理しているところです。」という記載がなされており、回想法の終了はまだまだ途中経過であり、Aにとっては、ライフレビューブックの作成が最終的な目標であることが改めて示された。なお、ライフレビューブック作成については、Aと筆者との間で継続して取り組むことが確認されており、別

途経過等を整理し、報告することも検討したい。

今回、Aに対する訪問教育授業において、自立活動の時間を中心に回想法を取り上げたことによる具体的な成果については、3学期通知票にも評価(表6)として示しており、A自身とも確認し合うことができた。何よりA自身が主体的・意欲的に活動に参加し、筆者との信頼関係を構築する中で、回想を重ねるごとに語ろうとする内容に広がりや深まりが感じられるようになっていった。また、相手にわかりやすく伝えようとするようになり、言葉自体も落ち着いてスムーズに出せる場面が増えていった。このことは、回想法の取組に限らず、年度初めに立てたコミュニケーションに関する目標にも関連しており、年度末に行った本人の年間目標の自己評価(表8)においても、「人と話をするには、相手の言うことをよく聞くこと、自分の言葉をはっきり言うことの両方が大事だとわかった。」という評価につながったと言えるだろう。

## 2) 心理的視点における意義

回想法は、アメリカの精神科医ロバート・バトラー(Butler.R.N., 1964)が提唱した高齢者に対する心理療法であり、高齢者の過去の人生史に焦点を当て、良き聞き手とともに過去を紡ぎ直すことを通じ、高齢者のアイデンティティの再構築や人生の統合を図ろうとする方法である(2008, 黒川)。これは、エリクソン(Erikson.E.H., 1950)が、高齢期の心理社会的課題として提起した「自我の統合」対「絶望」に関わっている。統合とは、自分個人のライフサイクルを自分が生きてきた歴史の中で意味あるものとして受け入れていくことである。Aに対する回想においても、自分がこれまで歩んできた人生を振り返りながら、様々な反応が示された。特徴的な内容を以下に示す。

まず、Aとテレビとの関係が挙げられる。回想を開始するに当たり、最もAが振り返りたいと思っていた内容もテレビのことであった。最初は、昔見ていた番組等のことが話題の中心であったが、全11回行った回想の内、実に8回の回想でテレビの話題が触れられている。Aにとってのテレビは、母子分離のきっかけになったものであり、日中家族が全員出かけて一人になることがあっても、寂しさを紛らわす友だちのような位置付けであったと思われる。また、学校に行くことができなかったAにとってテレビは、多くの情報を得ることができ、文字について



もテレビを見て覚えるなど、学校や教師の役割も担っていた。さらには、テレビが家に入ったばかりの頃は、時々近所の人が集まってきて、みんなで野球を観戦することなどもあり、家族や近所の人との交流を図る象徴にもなっていたと思われる。

次に、学校に対する思いが挙げられる。学校に関する話題は、第1回の回想と第9回から第11回までの計4回なされているが、自分自身のことが語られたのは第11回の回想だけで、残りの3回については兄や姉の学校に関する話題であった。第11回目の回想では、「お兄さんやお姉さんは学校に行っていましたか、そのことをどう思っていましたか？」という質問には、「なんとも思わなかった。」と答えていたものの、ある程度話が進み、「学校に行きたいとは思いませんでしたか？」という問いには、「思っただけのこともある。」「勉強したいと思っていた。」と答えている。その後、施設に入所してから改めて学校に行きたいという思いを抱き、職員にお願いしたこと、実際に行けるようになるまでにそれから2年間かかったこと、学校に行けることが決まった時の思い、実際に行ってみての思い、これからの目標等が語られたが、特に感情が高ぶるようなことはなかった。しかし、4月当初に授業でかわり始めた頃のAは、学齢期に教育委員会の人が自宅を訪問された際に、母親が学校に行かせることを断ったことがあるという記憶を悔しそうに語ったことが印象に残っている。1学期の終業式においても、本人の挨拶の中で学校に行けるようになった喜びと今後の学習への期待が示される一方で、当時の「悔しかった思い」についても語られていた。第11回回想は2月末に実施されており、実際に訪問教育で1年間学校での勉強を積み重ねてきたことで、当時学校に行けなかったという悔しさを強く押し出すことから、「あと5年は学校に行きたい。高校までは行きたい。」という未来志向の目標に向かうことへと移行することができたのではないだろうか。

また、結婚や人の死に関する記憶である。姉のことを尋ねた回想の際、最も印象に残っているのは結婚式の日には花嫁衣装を着たことであったと語っており、やはり五感で感じることでできる実体験は印象深く残ることがわかった。しかし、その一方で、「俺は結婚式には行っとらん。」と、姉の結婚式に出席できなかった記憶も強く蘇ることとなった。そのことがきっかけで、兄の結婚式にも参加できなかったこと、父親や兄の葬式にも参列できなかったこと、

母親の葬式には施設の職員に送迎してもらい出席できたことが思い出されたようだった。父親の思い出を語る際も、自宅での父親の療養中の様子や救急車で搬送されて亡くなるまでのことが、特に鮮明な記憶として残っているようだった。第3回の回想では、テレビの話題の途中で、突然同時期の出来事として、当時自宅に遊びに来ていた祖父が倒れて亡くなるまでの様子を語り始め、さらに曾祖父が亡くなった時の話にまでつながっていった。このように、特に身近で見ていた人の死には、大きな影響が与えられるということを改めて認識した。

さらに、家族との関係では、兄のことについて、第4回、第5回と2回の回想場面で、一緒に写った写真を見せながら思い出を聞こうとしたものの、最初は背景に写っている柿の木の話題に、次の会では当時飼っていた犬の話になり、ほとんど兄のことは語られなかった。その後、第8回回想で再び兄の思い出を尋ねると、「兄貴とは将棋をしょった。こたつに入ってしょった。」という具体的なエピソードが語られたものの、「小さい頃のことは、あまり覚えとらん。」「兄貴とはあまり良い思い出はない。」というようなコメントが返ってきた。兄は母親との間でもうまくいっていなかったことがAの話から推察され、A自身も兄からきつい一言を言われたこともあり、既に兄は亡くなっているとはいうものの、未だにAは複雑な気持ちでいることが窺い知れた。しかし、第9回、第10回回想では、家族の一員としての動きや家族全体での行動を振り返っての回想を行った際には、毎日繰り返される日常的な情景とともに、正月の家族全員揃っての楽しそうな様子が語られていた。

なお、すべての回想を終えてライフレビューブックの作成に向けて改めて家族一人一人に対する思いを尋ねると、その人を思いやる気持ちや感謝の言葉も示されており、限られた時間での回想だけでは、十分気持ちが整理しきれない場合もあることを押さえておく必要があるだろう。

その他、回想を重ねる中で、自分自身の障害のことや宗教のこと、施設入所に至るまでの経緯や思い等も語られた。これらのすべてがAにとっての人生そのものであり、計11回の回想法の試みを通して、そのことを共に振り返ることができたことで、A自身は少しでも自己の統合の感覚を感じながら自分の人生の意味づけを行い、さらに新たな目標へと向かっていくことができたのではないだろうか。また、

筆者自身もAの過去から現在そして未来に向かっていく姿やその時々思いに触れることができ、今後もAに対して尊厳を持って接していきたいという思いが強まった。以上のようなことから、訪問教育授業で回想法に取り組む上での心理的意義があることが明らかとなった。

### 3) ソーシャルワーク的視点における意義

回想法には、セラピーとしての回想法とともに、アクティビティとしての回想法、地域の世代間交流や伝承に関する活動としての回想法などさまざまなバリエーションがある(黒川, 2005)。野村(2006)は、高齢者と大学生との相互交流を意図したプログラムに端を発した思い出パートナープログラムの取組を紹介し、思い出を媒介にして、高齢者同士・高齢者と若者・高齢者と児童という社会的役割や立場の異なる人同士が相互に交流する機会をもつことによる相互作用の効果を述べている。時をつなぎ、地域をつなぎ、人をつなぐことが意図されており、高齢者と学生が話し手と聞き手、高齢者世代と若者世代としてのパートナーとして、過去・現在・未来の橋渡し、対象から変遷のつなぎ手という時をつなぐ要素が強調されている。実際にプログラムに参加した学生が、「話してみるとタイムマシンに乗って、その時代にいた子どものように新鮮で心地良かった」と述べているが、このような感覚は、Aに対する回想法において、昔のことを思い出しながら語るAの話の聴きながら筆者が感じていたことと重なっている。第5回回想では、当初は兄と一緒に写った写真から、兄との思い出が語られると考えていたが、庭の情景を見て想起されたのか、当時飼っていた犬の話題で終始会話が展開された。10分間という短時間での回想であったにもかかわらず、本人が話したい内容だったこともあり、切れ間なく会話が進んだ。エピソードも「犬に顔をなめられた」、「玄関まで犬は入ってきよった」というように、五感全体で記憶していることが印象深かった。第6回回想では、Aは母と一緒に写った写真の背景を見て、その頃住んでいた家の近所の状況が鮮明に思い出されたようで、まるで映像を見ているかのような具体的描写による説明を詳しく行った。いずれの話題も、当初予定していた内容とは異なり、急に思い出されたようであったが、語り始めると話が止まらなくなり、関連する話題が続いていった。このようなことは11回の回想に取り組む中で何度か見られたが、少なくとも

そのようなエピソードを語っている時のAは、時空を超えてその時の情景や感覚、気持ちなどが蘇っているように感じられ、その一方で、聞き手である筆者にとっても、その場面をAと一緒に共有しているような不思議な感覚を味わうことになった。

また、筆者より一回り以上年上のAの話は、筆者自身も直接見たり体験したりしていたことと、そうでないことが両方含まれており、懐かしい気持ちにさせられると同時に、新鮮に感じられることもあった。また、学校に行けなかったAの学齢期の頃の話の聴きながら、筆者自身が学生時代にかかわっていた障害者団体のこと(後藤・黒木・中山, 2002)を振り返り、Aと同様に学校に行けなかった数名の成人障害者のことを思い浮かべ、当時のその人たちもAと同じような思いでいたのかもしれないということを考える機会にもなった。このように、回想法には、Aの思い出の聞き手である筆者自身が、自分の思い出をも振り返り、様々なことを考えるきっかけにもなるという効果がみられた。一方、A自身も回想を通して、自分の言葉で語ることにより、改めて過去の出来事やそれぞれの家族との関係性が整理されているように思えた。さらに、あやふやな記憶については、唯一の生存する身内である実姉に自分から確かめたり、回想法の取組を知った姉から当時の写真が提供されたりするなど、回想法の取組がきっかけとなり、姉弟の関係性がより強くなるという成果もあった。

さらに、黒川(2008)は、世代間交流としての回想法は、さまざまな場でさまざまな人がさまざまな形で実施する可能性があり、多領域の人が出会う機会となり得ることを指摘している。Aに対する回想法の取組においても、昔のことを回想したことがきっかけとなり、振り返った内容を自作の「新聞」制作にクイズ形式で取り入れることにより、他の生徒や教師の関心が高まり、クイズに答えたり、Aがスクーリングで登校した時に声をかけられたりする機会が増えていった。また、昔のことで知らなかったことを学ぶことができ、Aのことを正しく理解しようとするようになるなど、世代間交流を通しての成果も見られた。このように、回想法には、語り手と聞き手の双方が相互に影響を与え合い、つながり合うことにより共生社会を目指すソーシャルワーク的な視点での意義があることも明らかとなった。

#### 4) 今後の学齢超過者に対する教育保障の必要性

高年齢の学齢超過者の訪問教育で回想法を活用した授業に取り組む意義を、教育的・心理的・ソーシャルワーク的な視点から考察したが、最後に、今後の学齢超過者に対する教育保障の必要性について述べる。猪狩（2008）は、就学猶予・免除の成人障害者の教育権の回復をめざして、①当事者の要求、②権利としての学校教育、③生涯教育・社会教育の保障という3つの論点から整理している。

①当事者の要求とは、就学猶予・免除された当事者や保護者の中に抱かれ続けてきた学校教育への願いそのものである。現在、多くの自治体で進められている学齢超過者への教育を保障する取組は、当事者や保護者の強い願いと粘り強い取組に支えられてきた。その思いはAをはじめとする、ようやく学校で学べるようになった学齢超過者にも受け継がれ、現在60歳代前半のAの場合、回想法に取り組む中で、「あと5年は学校に行きたい。高校までは行きたいと思っている。」という明確な意思表示をすることにもつながっている。

②権利としての学校教育とは、成人した就学猶予・免除者の教育権保障の課題として捉えることである。Aのように、養護学校義務制実施以前に就学猶予・免除となり、養護学校が義務化された1979年当時、学齢（6-15歳）を超えていた人たちは、これまで学校教育への権利を拒否され続けてきた。しかし、2013年に障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律である「障害者差別解消法」が制定され、2014年1月には、障害者の人権及び基本的自由の享有を確保し、障害者の固有の尊厳の尊重を促進することを目的とした「障害者の権利に関する条約」が、我が国でも批准された。同条約の第24条では、教育についての障害者の権利を認め、この権利を差別なしに、かつ、機会の均等を基礎として実現するため、障害者を包容する教育制度及び生涯学習が確保されることが重要であること、その上で、障害のある者が教育制度一般から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供されること等が確保される必要性が示されている。文部科学省（2012）も、共生社会の形成に向けて、障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築のため、特別支援教育を着実に進めていく必要性を強調している。学齢超過者の課題解決に向けても、当事者の

権利という視点から捉えることが重要である。

③生涯教育・社会教育の保障とは、学校教育か社会教育かという択一的選択ではなく、学校教育において始まった実践と、これまで行われてきた施設での療育や社会教育における実践をつないでいくことである。後藤（2014）は、これまでかかわった3名の学齢超過者との訪問教育の取組を通して、①人は年齢に関係なく、常に「学びたい」という思いがある、②教育は、年齢に関係なく、人を成長させる力がある、③人はかかわりあうことで、影響を与え合い、お互いの認識も深まるという、3つの視点から教育的意義を整理している。しかし、日頃施設の生活だけでは学べないことや体験できないことが、学校の授業に期待される一方で、Aが入所する施設においても、音楽療法や囲碁教室、絵画教室などが計画的に実施されており、施設内での余暇活動として定着している。また、施設内外での様々な行事への参加や多くの人たちとのかかわりも入所者の楽しみにつながっていることが多く、学校生活だけですべてが満たされるわけではない。Aのような高年齢の学齢超過者にとっては、各人の生活様式等がある程度確立されているため、1回につき2単位時間（90分）の授業を週3回実施する訪問教育は当事者も受け入れやすい授業形態の一つと言えるかもしれない。いずれにしても、当事者のニーズを十分確認しながら、権利としての学校教育の前進と併せて、生涯教育の公的保障を一体的に進め、その中に回想法を取り入れた教育内容等を工夫しながら関連付けていくことが重要であろう。

#### 4. まとめ

本研究では、60歳を超える学齢超過者Aに対して、訪問教育授業で回想法を実施した。回想の内容や様子等の記録を基に評価・分析を行い、取組の経過に伴う変容等を整理し、分析結果から高年齢の学齢超過者の訪問教育授業で回想法に取り組む意義が明らかとなった。そして、いくつかの課題が残された。

今回、訪問教育の授業では、3学期に全11回に渡り回想法を実施したが、他にも年度末に取り組むべき学習課題は多く、回想内容を基に年度内にライフレビューブック作成に向けた本格的な取組へと発展させるまでは至らなかった。また、年度末には筆者のD特別支援学校からの異動も決定した。そのため、異動後は休日等を利用しながら、Aと筆者とでお互



いに時間を合わせて、その後の活動に取り組んではいるものの、授業として継続させることは困難となった。このように、授業で回想法を行うためには、その他の学習内容や時間、校内体制等の影響を受けることを考慮しておく必要がある。

さらに、今回の回想法の評価・分析では、A自身の言葉や文章による反応も具体的に取り上げながら、授業の経過に伴う変容やかかわりの中での気づきをもとに、担任としてかかわった筆者による評価・分析がなされている。今後は、評価・分析の観点を今回以上に明確にしたり、家族や施設スタッフ等の評価も取り入れたりして、より客観的な評価・分析方法を検討すべきであろう。

最後に、今回明らかにしようとした学齢超過者の訪問教育授業で回想法に取り組む意義は、あくまで60歳代前半の学齢超過者Aとのかかわりを通して整理されたものに過ぎない。今後は、他の学齢超過者に対しても同様の研究が積み重ねられ、より一般化された提言ができるようになっていくことを期待する。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、事例の掲載を許可して下さったA氏に深く感謝いたします。また、ご協力いただいたA氏のご家族、施設関係者各位に心よりお礼申し上げます。

## 文献

- 1) 阿部幸泰 (2012) 「学齢超過者の義務教育が始まって2年目」, あるがまま, なるがまま雑学 H.P., バックナンバー福祉・教育・医療等関係 (V). <<http://zatsugakuabe.web.fc2.com/backnumber/24-kouki/karei-2 nen.pdf>>
- 2) 阿部幸泰 (2013) 「学齢超過者の義務教育が始まって3年目」, あるがまま, なるがまま雑学 H.P., バックナンバー福祉・教育・医療等関係 (V). <<http://zatsugakuabe.web.fc2.com/backnumber/25-kouki/karei-3 nen.pdf>>
- 3) 猪狩恵美子 (2008) 特集 特別ニーズと教育・人権をめぐる争点「就学猶予・免除の成人障害者の教育権」, 全国障害者問題研究, 36(1), pp. 41-47.
- 4) 猪狩恵美子 (2014) 全国訪問教育研究会第27回全国大会 (南九州) 報告, 大会記念講演「訪問学級の子どもの願いに学ぶ—訪問教育のあゆみから」, 訪問教育研究2014, 27, pp. 5-15.
- 5) Erikson, E.H. (1950) *Childhood and society*. W. W. Norton. (仁科弥生 (訳) 1977, 幼児期と社会 I, みすず書房)
- 6) 外務省 (2014) わかる! 国際情勢「障害当事者の声の実を結ぶとき—障害者権利条約の締結」, 外務省 H.P. <<http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol109/index.html>>
- 7) 黒川由紀子・宮本典子・丸山 香・三橋喜久・黒沢幸子 (2001) 高齢者と子どもの心をつなぐ統合的アプローチ—高齢者施設における子どものボランティア活動の事前教育のあり方に関する研究一, 安田生命社会事業団研究助成論文集, 37, pp. 155-160.
- 8) 黒川由紀子 (1994) 痴呆老人に対する回想法グループ, 老年精神医学雑誌, 5 (1), pp. 73-81.
- 9) 黒川由紀子 (2005) 回想法—高齢者の心理療法, 誠信書房.
- 10) 黒川由紀子 (2008) 認知症と回想法第11章「世代間交流としての回想法」, 金剛出版, pp. 132-142.
- 11) 国際ソーシャルワーカー連盟: FSW (2000) ソーシャルワークの定義 (2000年7月27日, 総会にて採択, 2001年1月26日, 日本語訳 (定訳) 決定)
- 12) 後藤宏 (2014), 全国訪問教育研究会第27回全国大会 (南九州) 報告, 分科会報告⑥施設内の教育「就学猶予・免除を受けていた成人障害者のニーズに配慮した授業の試み—3名の学齢超過者との出会いと訪問教育におけるかかわりから—」, 訪問教育研究2014, 27, pp. 33-35.
- 13) 後藤 宏・黒木康代・中山 健 (2002) 障害児 (者) とその家族のニーズにこたえる障害者団体の実践—宗像あゆみの会の果たした役割—, 福岡教育大学障害児治療教育センター年報第15号, pp. 7-25.
- 14) 志村ゆず (2005) ライフレビューブック—高齢者の語りの本づくり, 弘文堂.
- 15) 中央教育審議会初等中等教育分科会 (2012) 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告)」 (平成24年7月23日付), 文部科学省.



- 16) 特殊教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議（1997）「特殊教育の改善・充実について（第一次報告）」、文部省.
- 17) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2011）独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 H.P., 障害のある子どもの教育の広場－8 [4]（4）訪問教育における指導. <<http://www.nise.go.jp/cms/13,980,50,208.htmlf>>
- 18) 内閣府（2013）障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（平成25年法律第65号）.
- 19) 西日本新聞（2007）障害者の学齢超過者就学問題, 2007年2月11日朝刊28面.（「The Nishinippon Web」<<http://www.nishinippon.co.jp/wordbox/word/4823/4636/>>にも掲載）
- 20) 野村豊子（1998）回想法とライフレビュー, 中央法規出版.
- 21) 野村豊子（2006）高齢者にかかわるすべての人へ第3回「高齢者の共感の力と思い出パートナー」, 月間総合ケア, 16(8), 医歯薬出版株式会社.
- 22) Butler,R.N.（1963）The life review:An interpretation of reminiscence In the aged.Psychiatry, 26, pp. 65-75.
- 23) 福岡県教育委員会（2009）「学齢超過者に対する訪問教育実施要領」（平成21年1月31日から施行）.
- 24) 文部科学省（2007）「特別支援学校の推進について（通知）」（平成19年4月1日付, 19文科初第125号）.
- 25) 文部科学省（2009）特別支援学校幼稚部教育要領, 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領, 特別支援学校高等部学習指導要領（平成21年3月告示）.
- 26) 文部科学省（2009）特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚部・小学部・中学部）.
- 27) 文部科学省（2009）特別支援学校学習指導要領解説総則等編（高等部）.
- 28) 文部科学省 H.P. 就学事務 Q&A : 8. 就学義務の猶予又は免除について. <[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/shugaku/detail/1310253.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shugaku/detail/1310253.htm)>
- 29) 文部省初等中等教育局特殊教育課（1978）「訪問指導事例集」, 文部省.
- 30) 文部省（2009）盲学校, 聾学校及び養護学校高等部学習指導要領（平成11年3月告示）.
- 31) 渡部昭雄（2009）障害青年の自分づくり—青年期教育と二重の移行支援第6章「青年期の『自分づくり』を支援する授業とは」, 日本標準, pp. 119-141.